

学習指導改善のために 教材(教科書)と指導方法と

三浦和尙 愛媛大学教育学部



私は近年、愛媛大学附属高等学校で公開研究授業をさせていただいている。その授業で、松沢哲郎「想像する力」(『明解 現代文B』)を学習材とした。

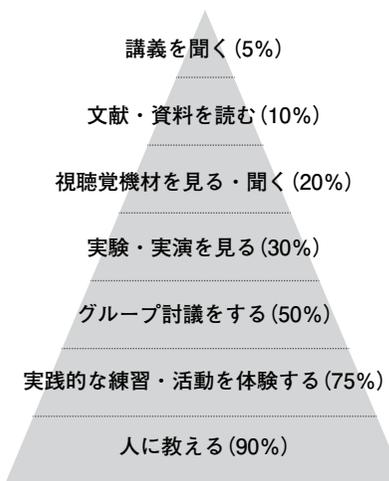
提案は、「三読法の見直し」である。「三読法」は、誤解を恐れず簡略に言えば、
・通読——文章内容を概括する。
・精読——内容を精査する。
・味読——内容を味わいまとめる。
の読みの層を経る読み方であり、意識的にも無意識的にも、多くの高校国語科学習の「読み」の形態は「三読法」を踏襲している。言うまでもなく、今日の国語科学習指導法開発は、課題解決型、国語単元学習、アクティブ・ラーニング等々、理念としては少なくとも三読法を超えている。しかし翻って、現実の高校現場では三読法を超える実践がどの程度定着しているか。さらに言えば、精読のみで終わって

いないか。通読・味読がどの程度意識的に行われているか。古文の学習など、精読・味読どころか、通読に終わる通読にとどまっていないか。

三読法を新しいとは言わないし、一定の批判もあるが、その三読法さえ消化されていないのが現実ではないか。
三読法を提唱した石山脩平は、当初は「通読・精読・味読」の後に「批評」を入れていたが、批評は解釈ではないということから外されて今日に至っている。

しかし、PISA型読解力で「情報の取り出し」「解釈」「熟考・評価」という過程が示され、「熟考・評価」のところが日本の学習者は弱いという指摘を受けていることに鑑みれば、三読法を発展させて「批評」(あるいは「評価」)までを「読み」と考えることも蓋然性がある。批評あるいは評価という、読み手の主体が

表出される読みが標榜されねばならない。私は何も三読法に戻れとか、三読法を徹底しろと言っているのではない。しかし今日、アクティブ・ラーニングなどが提唱される理由には、読み手主体を保障するという理念が含まれていることは間違いないだろう。そういう意味では、慣れ親しんだ三読法を見直すという視点は、決して無効ではない。そのとき、三読法を捨てて国語単元学習や課題解決学習のような活動型の学習に変えていくのか、三読法の有効性を生かしつつ今日的な改善を進めるのかは、教師の問題である。アクティブ・ラーニングという考え方を支える根拠の一つに「ラーニングピラミッド」というものがある。これは学習効果(平均記憶率)が、次のような順に高くなるという学習モデルである。



ここでは、講義から実験・実演までを「伝統的学習法」、グループ討論以降を「チーム学習」としており、伝統的学習法が完敗という数字である。無論「平均記憶率」を「学習効果」と置き換えてい

いのかどうかは議論の余地はあるが、活動型の授業のほうが「知識の記憶」以外の部分が活性化されることは体験的に明らかであろうから、これを「学習の総体ではなく、平均記憶率にすぎない」と切って捨てることはできない。

これからの国語科学習指導を考えると、まず踏み込むべきは、学習主体を確立することであろう。

それは、アクティブ・ラーニングといった方向からも考えられるし、先述の「熟考・評価」あるいは「批評」といった視点からも考えられる。私自身は、アクティブ・ラーニングとひとくくりで言うよりも、「熟考・評価」あるいは「批評」といった読みの層を明確に指導過程として位置づけることが有効なのではないかと考えている。

冒頭にあげた私の公開研究授業の提案は、「熟考・評価」あるいは「批評」に向かわせるために「説明的文章指導の(通読段階)」をどのように工夫するかという試みであった。決して新しいことを

提案したわけではないが、「熟考・評価」あるいは「批評」に向かわせるためには「通読」段階を要約や語句の確認で終わらせるのではなく、読みの課題をもたせるような営みが必要だということである。これは本来の三読法でも「主題の仮説」のような形で求められていることである。ただ、そのような授業を可能にしたのは、そういう展開が可能だった教材であるという点を抜きに語ることはできない。松沢哲郎「想像する力」は、根本のところ「人間とは何か」という課題を置き、実験結果に基づいて、チンパンジーなどの特徴を人間と比較しながら、人間とチンパンジーを差異化しているのは「想像力」の有無であると結論づけている。この教材は、写真や図版の意味の吟味、小見出しの吟味、具体例の意味づけなど、「生活能力としての読む力」を育てるのに格好の教材であるが、「ここに何が書かれているか」ではなく、「この文章からあなたは何を考えるか」を突きつけることができる教材でもある。その問いによって学習者主体が立ち現れることが期待されるのである。



松沢哲郎「想像する力」(『明解 現代文B』)

次のページからは、本稿でもふれている「アクティブ・ラーニング」を特集しています